

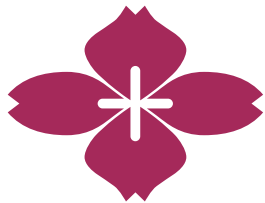


建学の精神

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」
(ヨハネによる福音書 15 章 12 節)

共愛学園では「共愛」を今日的に「共生の精神」と解釈しています。「共生」は、人類共通の願いであり、時代の変化に左右されることのない普遍的な原則です。

激動する現代社会にあって、国内外に生起するさまざまな課題を担い、共生の精神を模索、実践できる人材を育成することが学園の使命です。



共愛学園 校章・マーク
他校の生徒と区別するために、1902 年（明治 35）からは袴の裾に、徽章を縫い付けました。このマークは「ともさくら」と呼ばれ、中央の十字架は昭和の初めごろに加えられたといひます。

学校法人 共愛学園

〒379-2192 群馬県前橋市小屋原町1154-4

TEL : 027-266-7575 FAX : 027-266-7576



創立

共愛学園は 1888 年（明治 21）群馬県のクリスチャンの尽力により設立された前橋英和女学校に始まります。

当時の群馬県は、養蚕、製糸業の繁栄の中にありました。生糸貿易にかかわることで欧米の文明に触れる機会が生じ、キリスト教に出合って入信する人も増え、クリスチャンの数が東京、大阪、兵庫、神奈川について全国で 5 番目に多かったともいわれています。群馬名物の「上毛かるた」には内村鑑三や新島襄の名前も見受けられるほどです。

この地でクリスチャンになった人たちは、キリスト教主義に基づく人権、自由民権運動思想の持ち主が多く、男女平等についても先進的な考えを持っていました。

そのような気運の中、1886 年（明治 19）群馬県会議員の高津仲次郎が中心となり、彼の使命に共鳴した地元クリスチャンが教派を超えて協力し、〈前橋英学校〉を設立しました。これは男女共学の英語学校でしたが、当時としてはあまりにも先進的な校風であったため、経営難に陥り 2 年後に閉校となってしまいます。神戸女学院を卒業し英語を教えていた不破きよは、夫で前橋組合教会牧師の不破唯次郎、村山雪、笹尾縫らとともに、英学校の女生徒救済と女子の中等教育のため、女学校設立に立ち上がりました。不破唯次郎は同志社を卒業後、新島襄の斡旋で前橋組合教会に着任した人物です。

これを受け、高津仲次郎、関農夫雄、深沢利重らは、1888 年（明治 21）2 月 29 日夜、前橋市内横山町の鍋屋旅館で、前橋英学校の資産譲渡を行ない、新しい女学校設立のための会合を開きます。このとき、反国家主義者たちの政治活動という嫌疑をかけられ、彼らは保安条例違反容疑で前橋刑務所に一週間拘引されました。これがいわゆる鍋屋事件です。

後年、この 2 月 29 日が創立記念日と定められましたが、うるう日で 4 年に 1 度しかないため、通常は 10 月 29 日が代わりに記念日とされています。



鍋屋事件で拘引された創立者たち
1888 年（明治 21）2 月 29 日夜、鍋屋旅館における会合で
保安条例違反容疑をかけられ、
前橋刑務所に一週間拘引されました。



創立の背景と歴史

グレンジャーは、言葉も環境も慣れない異国での生活に苦しみました。夫人と長女も一年後に来日しますが、アメリカ本部からの支援は途絶えがちで、生活必需品であった蚊帳までも売って、困窮をしのいだこともありました。

来日する以前から、グレンジャーにはリウマチの持病がありましたが、過労のためか 1899 年（明治 32）急な発熱に見舞われ、尿毒症を併発して重体に陥りました。自分の死が近いことを知り、数名の生徒を病床に呼び集め「日本の同胞を愛するか」と質問、続けて「自分は使命を果たせなかった。あなたがたも主に忠実であってほしい」という最後の言葉を残して、55 歳で息を引き取りました。遺言に従って、青山墓地に葬られています。

グレンジャーの奉仕はわずか 3 年でしたが、学長の職務を捨て、敢えて困難な日本宣教の道を選んだ犠牲的な献身により、彼が愛し、育てた日本の学生たちは、グレンジャーの跡を継いで日本各地に散り、さらに朝鮮（当時）、樺太、南の島パラオ、台湾にまで再臨使命を語り伝えました。

しかし 1940 年（昭和 15）、皇紀二千六百年の祝賀に前後して大政翼賛会の成立、国家総動員法、治安維持法の拡大など、我が国に思想や宗教の統制が目立ち始めました。警察当局は教会への圧力を強め、SDA 世界本部は全宣教師の帰国を指示しました。セブンスデー・アドベンチストの横文字名称は変更を命じられ〈安息日再臨教団〉と改名しましたが、「戦時下に“安息”とは何事か」と厳しく迫られて〈第七日基督再臨教団〉と再度改称しました。『末世の福音』誌も文部省宗教課の検閲を経なければ出版はできず、名称も『健康と人生』に変えざるを得ませんでした。

初めは共産主義を取り締まることが目的であった治安維持法に、宗教団体の活動、信仰に関する項目が加えられ、宗教班が組織されました。教会礼拝でも天皇への忠誠、最敬礼、戦勝祈願、宮城遙拝が強制されました。特高警察は身を隠して教会の集会に出席しては牧師、信徒の動きや発言、祈りの言葉まで記録して反戦的な言動を細かく当局に報告し、治安維持法違反の証拠掴み、起訴、そして一斉検挙に着々と準備を重ねました。果たして 1943 年（昭和 18）9 月 20 日、月曜日の早朝、警察は全国のアドベンチスト教会の一斉検挙を行ない、42 名の全牧師を逮捕、警察施設に連行しました。捕囚となった牧師のうち 4 名は過酷な状況の中で死に、遺体をひそかに下げ渡すという悲慘を味わいました。66 歳のある老牧師は、桜田門に今もある警視庁の柔道場で毎日のように乱捕りの相手にされて昼に投げ飛ばされる苦痛を味わっています。

1945 年（昭和 20）、日本の敗戦とともに教会に自由が戻ってきました。牧師たちも釈放されて母教会に帰りました。軍の保養所になっていた三育学院キャンパスをはじめ資産は返還され、活動の再開を許されました。教師、生徒たちは徐々に集まってきて荒れたキャンパスを片づけ、1947 年（昭和 22）1 月、三育学院再開のうれしい朝を迎えました。生徒たちはしっかり手をつなぎ、教師、職員とともに自由に声を挙げて讃美歌を歌えることに感涙し、祈りの言葉も高く空にのぼりました。辛苦を舐めた先輩牧師たちは、詩篇 126 篇を朗読したといひます。